

中原遺跡

長野県塩尻市中原遺跡

発掘調査報告書

1987

塩尻市教育委員会

中原遺跡

—長野県塩尻市中原遺跡
発掘調査報告書—

1987

塩尻市教育委員会

序

中原遺跡は、塩尻市大字片丘北熊井の舌状台地に位置し、以前より縄文時代前期から平安時代にいたる複合遺跡として知られていました。この度、昭和59年度から当市内で開始されました長野県松本地方事務所所管の東山山麓地区農道整備事業により遺跡の一部が破壊されることになったため、工事施工に先立ち、埋蔵文化財保護の立場から塩尻市教育委員会に緊急発掘調査が委託され、市教育委員会では、小松克己先生を団長に調査団を編成いたしました。

発掘調査は、昭和61年11月下旬から同12月中旬にかけて行われました。調査区の結果、縄文時代前期、中期、後期、弥生時代初頭、平安時代におよぶ多時期の遺物を得ることができ、遺跡の性格を捉えていく上で貴重な資料を提供することになりました。

終わりにあたり、本調査にご理解、ご協力を下さいました地元関係役員、地主の方々、また初冬の寒さの中で献身的に作業にご協力いただいた発掘調査参加者の方々など関係各位に深甚の謝意を表するものであります。

昭和62年2月

塩尻市教育委員会
教育長 小 松 優 一

例　　言

1. 本書は、昭和61年度農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業東山山麓地区に伴う、松本地方事務所と塩尻市教育委員会との契約に基づいて、塩尻市大字片丘北熊井地区における中原遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、中原遺跡発掘調査団（団長 小松克己氏）に委託し、現場での調査は、昭和61年11月22日から12月11日まで実施した。
3. 遺物および記録文の整理作業、報告書作成は、平出遺跡考古博物館において昭和61年12月から昭和62年2月まで行った。
4. 本書の執筆は、各調査員・調査補助員が分担して行い、文責は文末に記した。
5. 本書の編集は、小林、鳥羽、伊東が行った。
6. 本調査の出土品・諸記録は、平出遺跡考古博物館に保管している。

目 次

序	
例 言	
第I章 調査状況	1
第1節 発掘調査に至る経過.....	1
第2節 調査体制.....	2
第3節 調査日誌.....	3
第4節 遺跡の状況と面積.....	4
第II章 遺跡周辺の環境	5
第1節 自然環境.....	5
第2節 周辺遺跡.....	5
第III章 遺跡の概要	8
第1節 遺跡の概要.....	8
第2節 発掘区の設定.....	8
第IV章 遺 構	11
第1節 ロームマウンド.....	11
第2節 小竪穴.....	15
第3節 ピット.....	15
第V章 遺 物	17
第VI章 中原遺跡の過去の調査	20
第VII章 まとめ	24

第Ⅰ章 調査状況

第1節 発掘調査に至る経過

昭和58年度から開始された県営農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業東山山麓地区は、順次工事が進められ、昭和59年度からは塩尻市地域もその対象地区となった。当事業により設置される通称「山麓線」が通過する塩尻市片丘地区は、市内でも有数の遺跡密集地域であることから、塩尻市教育委員会は事業主体の長野県松本地方事務所と埋蔵文化財保護の立場から再三にわたる協議を重ね、昭和59年度は片丘南内田地区の山ノ神遺跡において発掘調査を実施し記録保存を図った。

今年度は、当初予定されていた事業範囲により今泉、竹ノ花の2遺跡について発掘調査が計画されていた（別報告書）。こうした中で、昭和61年8月29日、事業拡大による埋蔵文化財緊急発掘調査について、松本地方事務所、市耕地林務課、市教育委員会の三者による追加協議が塩尻市総合文化センターでなされ、中原遺跡の発掘調査を実施することになった。これにより市教委は、11月10日付で松本地方事務所からの中原遺跡発掘調査に関する委託を受け、さらに市教委は11月18日、当該調査を中原遺跡発掘調査団（団長 小松克己氏）に再委託した。現場における発掘調査は、11月22日から12月11日に行われた。

発掘調査計画書（一部のみ記載）

1. 発掘調査地 塩尻市大字片丘
2. 遺跡名 中原遺跡
4. 発掘調査の目的および概要 開発事業農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業東山山麓地区に先立ち400m²以上を発掘調査して記録保存を図る。遺跡における発掘作業は昭和61年12月20日までに終了する。調査報告書は昭和62年3月25日までに刊行するものとする。
5. 調査の作業日数 発掘作業14日 整理作業14日 合計28日
6. 調査に要する費用 2,700,000円
7. 調査報告書作製部数 300部

第2節 調査体制

団長 小松 克己（塩尻市誌編纂委員長）

調査団 小林 康男（日本考古学協会員、市教委）

鳥羽 嘉彦（長野県考古学会員、〃）

伊東 直登（〃、〃、〃）

調査補助員 腰原 典明（信州大学学生） 柳沢 正寿（信州大学学生）

参加者 青木昌子、池田貴江子、伊東逸子、小松アヤ子、小松重昭、小松重久、小松静子、小松淳子、小松鈴子、小松ます子、小松三枝子、小松三津子、小松三和子、小松幸美、小松幸代、小松義九、桜井洋子、竹瀬まさみ、南澤みや子、柳沢千寿子、吉江みより、青木千秋、池上清三、五味ますみ、中村芳晴、藤松謙一、保科武久、山口字一、横山きよ子、吉江正男、太田正子、金田和子、中村ふき子、古厩馨子、山本敬子

事務局 塩尻市教育委員会教育長 小松 優一

市教委総合文化センター所長 二木 三郎

〃 文化教養担当課長 清水 良次

〃 文化教養担当次長 原田 博

〃 平出遺跡考古博物館学芸員 小林 康男

〃 文化教養担当主事 鳥羽 嘉彦

〃 〃 伊東 直登

協力者 小沢達水、小松広治、浜 文雄、小口欽也、小松市之助、小松 弘、小松生和、小松不俟春、中野 智、武居信治、島崎喜美男、菊池和利、小松嘉彦、小松正広、竹瀬元亮、小松修治、中野喜夫

地権者 南沢兼美、南沢要次、南沢繁勝、小松達郎、小沢佳也、小松重昭

第3節 調査日誌

昭和61年11月22日（土）晴 バックフォーにより表土除去開始。

11月23日、24日（日、月） 定休日

11月25日（火）晴 本日から作業員も参加しての調査開始。調査方法等の説明後、テント設営、調査区北側の南向き斜面にて助簾による検出作業を始める。遺構らしい落ち込みは確認されなかったが、土師器片、黒曜石フレーク、打製石斧等出土。バックフォーによる表土除去続行。

11月26日（水）晴 調査区南側の台地上にて検出作業を開始する。礫をほとんど含まないローム層検出。黒曜石フレーク、無文の土器片等少量出土。

11月27日（木）晴 5×5 mグリッド設定。西から東へA～G、北から南へ1～35。台地上の検出作業を続ける。霜が全面に降り、作業に支障をきたす。

11月28日（金）快晴 調査区南側での検出作業続行。磨製石斧出土。1S、半載掘下げ後、セクション図化。

11月29日（土）曇時々雪 1S、全掘後、写真撮影。2S、セクション図化後全掘、写真撮影。検出作業により、新たに2ヶ所の小堅穴と思われる落ち込み検出。雪の舞う、寒い一日だった。

11月30日（日） 定休日

12月1日（月）快晴 1、2S、平面図測図。3～5S、半載しセクション図化。5S全掘後写真撮影。調査区南の台地上における検出作業をほぼ終了したが、台地上中央を流れる川の北側では一片の遺物も得られなかった。本日から12月に入り、雪による調査への影響が日々懸念されるところであるが、今日は穏やかな一日だった。

12月2日（火）快晴 南の台地上、川に挟まれた区域の全体写真を、全面清掃後撮影する。3、4S、全掘後写真撮影。調査区域が礫の多い部分となり難行し始める。北側からも検出作業を始めたところ、土師器片、繩文土器片、打製石斧等出土。

12月3日（水）晴 3～5S、平面図測図。F-16グリッドにおいてロームマウンドと思われる落ち込みを検出したため、検出面での平面図測図後半載し、ロームマウンドと確認する。

12月4日（木）曇後雨 1号ロームマウンド、セクション図化。G-15、16グリッドにおいて2号ロームマウンド検出。平面図測図後、黒褐色土部分の掘下げを行う。

12月5日（金）晴 1号ロームマウンド、全掘後写真撮影。2号ロームマウンド、セクション図化、写真撮影。6S、半載しセクション図化後全掘、写真撮影。

12月6日（土）快晴 1、2号ロームマウンド、平面図測図。7S、セクション図化後全掘、平面図、写真撮影まで終了。G-3グリッドにおいて、直径、深さとも20cmほどのピット内から、平安時代土師器の甕の破片一括出土。G-4、5グリッドに黒褐色土の広がりがあるため、1m幅トレンチを設定し掘下げてみるが遺構となる要素は何もない。

12月7日（日） 定休日

12月8日（月）快晴 6S、1P、平面図測図。G-14グリッドにて、調査区域外に半分以上を持つと思われる3号ロームマウンド検出。全掘後セクション図化、平面図測図、写真撮影。

12月9日（火）快晴 F-5グリッドにおいて、4号ロームマウンドを検出。平面図測図後、南北に半載線を設定し、掘下げる。調査区北側を中心に作業を進める。

12月10日（水）曇 4号ロームマウンド、セクション図化後全掘し、平面図測図、写真撮影。調査区北側のグリッド別遺物取り上げを行う。全体図作成。

12月11日（木）快晴 全面清掃後、北側および南側からの全体写真撮影。テント解体、器材整備の後、器材搬出し、全日程を終了する。

整理作業は12月～2月、平出遺跡考古博物館において実施された。出土遺物の洗浄、注記、復元作業、実測図作成、作成図面の整理、製図、図版作成を行う。報告書の原稿執筆も併行して実施する。

第4節 遺跡の状況と面積

遺跡名	場所	現況	種類	全体面積	事業対象面積	最低調査予定面積	調査面積	発掘経費
中原	塙尻市片丘 北熊井	畠	包蔵地	10,000m ²	2,000m ²	400m ²	1,600m ²	2,700,000

第1表 発掘調査経過表

月 遺跡名	11	12	1～2	主な遺構	主な遺物
中原	発掘	遺物整理 図面作成 原稿執筆		ロームマウンド 4 小 穂 穴 7 ビ ッ ト 1	縄文時代 前期、中期、後期土器 弥生時代 初頭土器 平安時代 土師器 石 器

（事務局）

第Ⅱ章 遺跡周辺の環境

第1節 自然環境

中原遺跡は、塩尻市大字片丘北熊井にある。片丘地区は、高ボッチ山塊の西麓斜面に沿って発達する崖錐性の丘陵で、塩尻市街東方の小坂田付近から松本市寿付近に至る東西2km前後、南北約10kmにわたる地域のほぼ中央に位置している。山麓から流下する群小の河川による開析と、複合層地の形成による複雑な地形を呈し、西へ向かって細長く尾根状に延びる幾筋もの台地上に数多くの遺跡が展開している。眼下には松本盆地の平が広がり、北アルプスの峻嶺が遠く連なる日当たりのよい好条件の立地環境にある。

中原遺跡が存する台地も南側と北側を深く開析され、南北約200mにおよぶ比較的広範囲の東西に延びる尾根状台地となっている。東に女夫山ノ神、南に牛亮沢、俎原、西に大沢、北に竹ノ花の各遺跡を隣接させている。発掘調査は、この台地上西端部で実施され、調査区南側は東に向かって台地が広がり、北側では、比高差4m以上をもって通称「大石窪」の名が示すとおり、大小の礫を多量にもつ産地となっている。標高は760~765mである。

(伊東 直登)

第2節 周辺遺跡

中原遺跡は筑摩山地東麓に展開する数多くの遺跡のうちの一つで、縄文中期・後期、弥生中期・後期、平安時代各期にわたる遺跡である。

この地域の縄文中期の遺跡には、狐塚、渋沢、境沢、竹原、舅屋敷、富士塚、源十窪、一本杉、長者清水、篠沢、俎原、立石、大沢、女夫山ノ神、菖蒲沢、牛亮沢、城があり、やや北方の南内田地盤には小丸山、二本木、君石、西方の南熊井には上木戸、山ノ神など多くの遺跡が知られている。このうち俎原、女夫山ノ神、小丸山、上木戸、山ノ神は発掘調査が実施され、住居址が検出されている。中原遺跡の南に隣接する台地上には147軒の住居址からなる大集落址俎原があり、北側には竹ノ花、城廻遺跡があり、ともに中期の遺物が採集されている。このように南・北両台地上に同時期の集落が営まれていたことから考えると、中原遺跡住民の生産、居住など日常活動はこの遺跡の立地する台地上で行われていたものと想像される。

縄文後期の遺跡は、渋沢、舅屋敷、小丸山、下境沢、君石、上木戸、山ノ神などが知られる程度で、遺跡数は激減する。しかもその内容は土器片が断片的に出土しているにすぎず、その在り方は極めて痕跡的である。

中原遺跡では、弥生中期初頭の土器片がわずかではあるが出土している。近時、筑摩山地山麓



- 1. 中原遺跡
- 2. 内田原遺跡
- 3. 君石遺跡
- 4. 丘中学校遺跡
- 5. 北ノ原遺跡
- 6. 上木戸遺跡
- 7. 大原遺跡
- 8. 稚原遺跡
- 9. 向阳台遺跡
- 10. 中挾遺跡

第1図 遺跡位置図

から田川に至る地域でこの種の遺物の出土が注目され始めている。福沢、君石などで初期弥生文化期の様相解明の資料が次第に整いつつある。この時期の遺跡は一般的には田川を臨む低地域に立地するが、中原は例外的に高所にあり、その特異性が注目される。

弥生後期の遺跡は田川流域を中心とした低地に立地する。狐塚、渋沢、下境沢、上木戸、大原、丘中学校、黒崖、北ノ原、向陽台、中挾などがあり、発掘調査によって住居址が発見されているものに大原、上木戸、向陽台、北ノ原、中挾がある。このうち大原、向陽台、中挾では方形周溝墓も発見されており、当時の集落の在り方を知るうえで貴重な資料となっている。

古墳時代に属する遺跡は、竜神平、中挾があり、竜神平では祭祀遺物を出土した2軒の住居址が発見され、中挾では、4軒の住居が検出されている。今のところ遺跡の発見例は少ない。

平安時代では、狐塚、渋沢、境沢、舅屋敷、今泉、粗原、横町、五千石、女夫山ノ神、別方、菖蒲沢、牛亮沢、小丸山、内田原、二本木、下境沢、桜林、君石、上木戸、山ノ神など比較的高所にまで多くの遺跡が知られている。小丸山、内田原、君石、舅屋敷、粗原では住居も発見されている。これらの遺跡は、田川流域に當まれた吉田川西、吉田向井、丘中学校などの大集落と対峙して存在した小集落といえる。中原でもこの時期の土器片が出土しており、周辺の他の遺跡と同様、近時、問題が深化しつつある里棲み集落、山棲み集落研究に活用されるべき遺跡といえよう。

(小林 康男)

第三章 遺跡の概要

第1節 遺跡の概要（第2図）

今回発掘調査の対象となった中原遺跡は、塩尻市の東北部、片丘地区に複雑に形成された複合扇状地の比較的広範囲な一台地上にあり、南側には牛亮沢川により深く開析された狭隘な谷間を隔てて沮原遺跡の存在する台地が臨まれる。

調査は、中原遺跡の立地する台地西端を道路用地が横切ることとなり、遺跡の縁辺部と推定される部分を行なうかたちとなった。また、調査区の半分が、通称「大石窪」と呼ばれる礫層の窪地に設定されているため、当初から多くの成果は期待できなかった。

調査の結果、遺構は、ロームマウンド4基、小豎穴7基、ピット1基が検出された。ロームマウンド、小豎穴からの遺物の出土はみられず、時期は判然としないが、形態的には第4号小豎穴が注目された。遺物は少量ながら、繩文時代前期、中期、後期、晩期、弥生時代初頭、平安時代の多期にわたるものが出土し、大部分は流れ込みと思われるものの、東側台地上に複合的な遺跡の存在することが確認された。また、調査区外東側に隣接する台地上でも、石鎚の表面採集をすることができ、これを裏付けることができた。なお、昭和40年に松本深志高校によって調査された箇所（概要は後述）は、今回の調査地から250mほど東の同一台地上である。

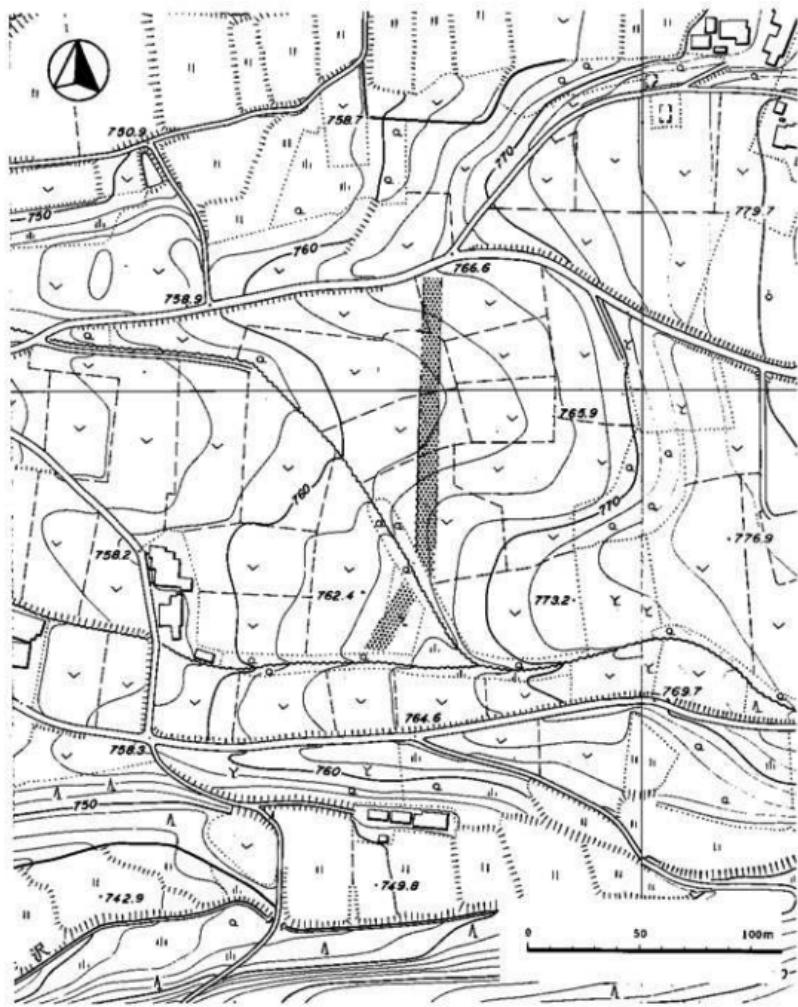
第2節 発掘区の設定（第3図）

道路用地は、片丘丘陵斜面に沿って東西に延びる中原遺跡の西端部を南北に横断するかたちで通過する。遺跡の中心からは外れていると思われたが、台地上のほとんど全区間約175mに調査区を設定することとした。調査区南側は、東に広がる広範な台地の西末端部となり、一段高所となっているが、北側は比高差4mを測る窪地となっている。

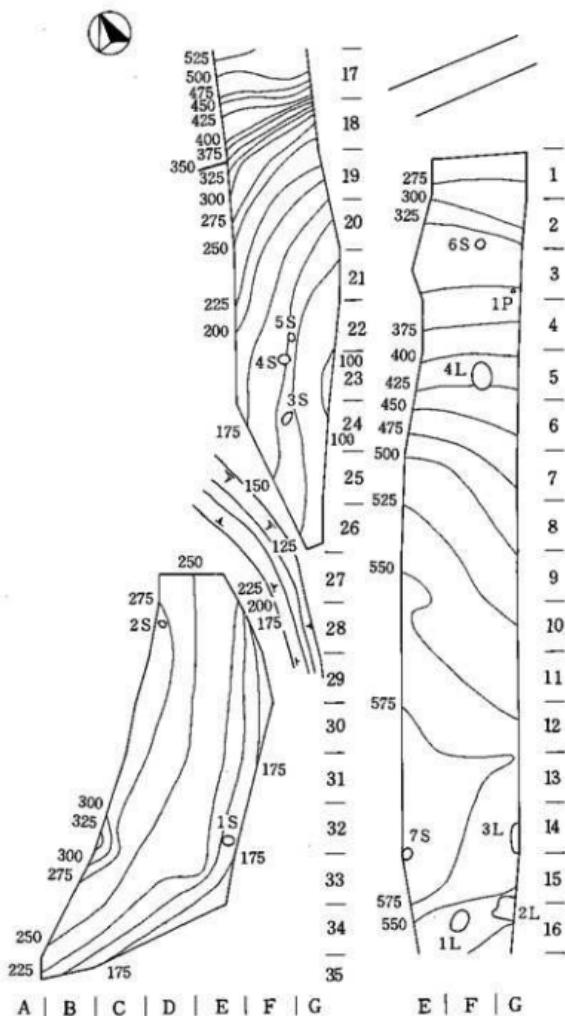
発掘調査に先立つ試掘調査によれば、調査区北側から中央にかけては深さ40~60cmで褐色のローム土を主体にした礫層となったが、上部暗褐色土中にも多量の礫の混入がみられた。南側台地上では、深さ20~30cmと比較的浅いところで、礫をほとんど含まない褐色のローム土層が検出された。

調査は、バックフォーによる表土除去を行った後、グリッド設定をした。グリッドは5×5mで、西から東へ向かってA~G、北から南へ向かって1~35となり、発掘調査総面積は、1,600m²である。

（伊東 直登）



第2図 中原遺跡調査地区図 1:2500



第3図 中原遺跡遺構全体図

0 10 m

第Ⅳ章 遺構

第1節 ロームマウンド

(1) 第1号ロームマウンド (第4図)

ロームマウンドは合計4基が検出されたが、16グリッドまでの調査区北側砂礫層内の緩やかな傾斜面からすべて検出された。第1～3号は、14、15、16グリッドに集中し、第4号は5グリッドに離れた状態で存在した。

第1号ロームマウンドは、4基中最も南側のF-16グリッドで検出された。検出面において、褐色ローム土中に黄褐色の橢円形ローム土を黒色土がドーナツ状に取り囲む形で認められたため、ロームマウンドと推察された。土層の観察記録化のため、半裁線をプラン長径の東西に設定し、セクション固化後全掘した。

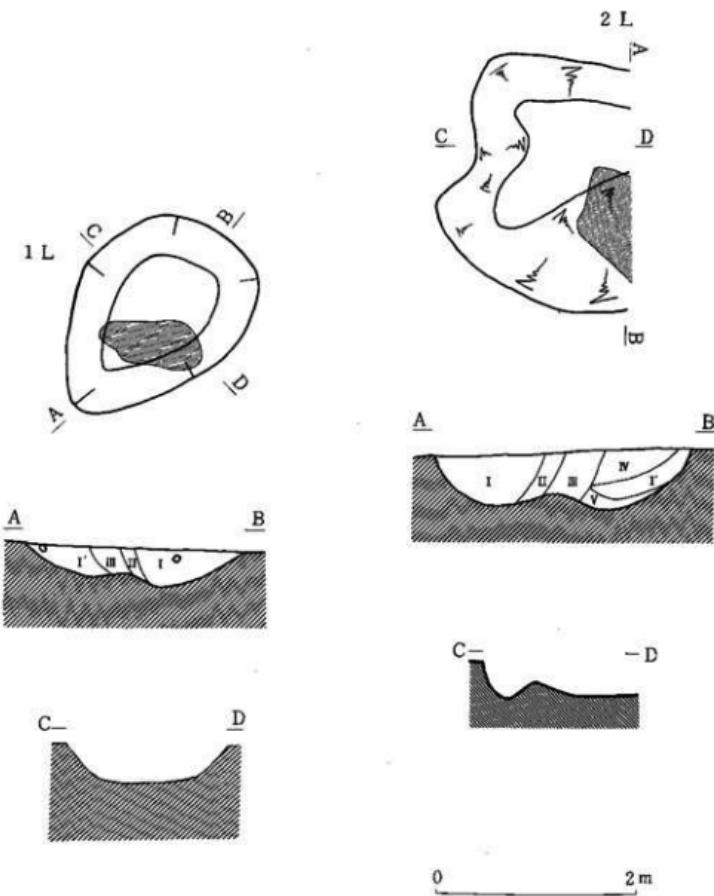
長径280cm、短径200cmの橢円形を呈し、落ち込みは目立った起状のない擂鉢状をなし、最深部で深さ46cmを測った。再堆積ローム土部は、検出面において長径105cm、短径45cmなどの南北橢円形プランで検出され、土層調査により東へ流れた形で地山と接して堆積していることが確認された。この東側に同様の堆積状態で暗褐色土が存在し、周囲を疎混入の黒色土が取り巻いていたが、西側の黒褐色土中には、直径2～3cmのロームブロックの混入が観察された。

遺物の出土はない。

(2) 第2号ロームマウンド (第4図)

G-15、16グリッドで検出され、西方2mには第1号ロームマウンド、北方4mには第3号ロームマウンドが存在する。東側3分の1ほどは、調査区外のため未調査である。ローム土に比して明らかに黄色のローム土を黒色土がドーナツ状に取り囲むように検出されたため、ロームマウンドと推察し、調査区境まで全掘し、セクション固化した。

プランは、南北270cmほどで基本的には円形と思われるが、北西隅がやや内側に入り込んでいる。検出面において中央ローム土部は、台形状に調査区外から張り出した形で認められたが、掘下げるに従い、N-45°～W方向に細長く延びて堆積しており、下部を地山に接したまま北西側壁にまで達していることが確認された。したがって、落ち込み全体を再堆積ローム土が分断するような状態を呈し、これをセクションでみると以下のようになる。再堆積ローム土は、地山のローム土より明るい黄褐色で粘性が強く、礫をほとんど含まずに、南から北へ流れた形で地山と接して堆積している。この南側では、砂質で直径1cmくらいの礫を多く含むローム土が、半凸レンズ状に存在し、下部には、直径2～3cmのロームブロックを含有する黒色土が続き、さらに最下



- I 黒色土(径10cm前後の砾若干含む)
I' " (ロームブロックを含む)
II 暗褐色土
III ローム
IV " (砂利を多く含む)
V " (黒色土をわずかに含む)

第4図 第1号・第2号ロームマウンド

層として、若干の黒色土を混入する砂質ローム土が最深部を形成している。再堆積ローム土北側では、当該層に押しつけたような形で直径5~10cm程度の礫を多量に含む黒色土が、幅20cmほどに再堆積ローム土部と同様の帶状に延びて存在し、さらに北側では、礫をほとんど含まない黒色土が堆積していた。上記土層中で注目されたのは、再堆積ローム土部北側に張りつくように確認された礫混入の黒色土層で、自然堆積の結果とは言い難い様相を呈していた。また再堆積ローム土南西側の黒色土層内において、若干の焼土および炭化物の出土をみた。しかし、この2点により当該ロームマウンドが人為的な遺構と推察するのは、やや性急にすぎるとと思われる。

出土遺物はない。

(3) 第3号ロームマウンド(第5図)

G-14、15グリッドで検出され、東側3分の2ほどは調査区域外のため未調査である。南方4mには第2号ロームマウンドが存在する。検出面において、南北150cm、南西50cmの半月状のローム土を、南北330cm、東西100cmの黒褐色土の落ち込みが取り巻くように認められ、ロームマウンドと推察されたため調査区域まで全掘し、セクション図化した。

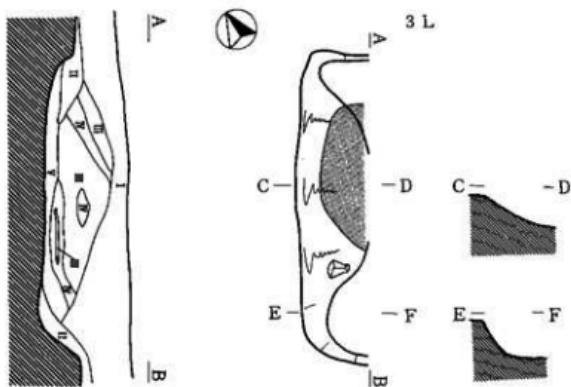
プランは南北330cmで、調査した限りでは隅丸方形を呈しているものの、半分以上が調査区域外のため全形は不明である。壁は、北と南で垂直に落ち込み、西側では中央部がやや張り出したようく緩やかな傾斜をもって底部へ続いている。地山検出面から底部までの深さは45cmを測る。土層については、落ち込み底面上に直径5cm前後の礫を含む黒褐色土が堆積している。この上に、粘性が強く少量の砂礫を含む褐色ローム土と、茶褐色土を若干含有する砂質ローム土層が、交互に堆積したような状態で最大60cmの凸レンズ状に存在している。ロームマウンド最上部は、地山検出面より40cmほど上に位置することが確認されたが、仮に当該ロームマウンド全体が調査区域内にあり、地山面まで削平された場合には確認しえなかったことを考えた場合、興味深い層位と言える。

出土遺物はない。

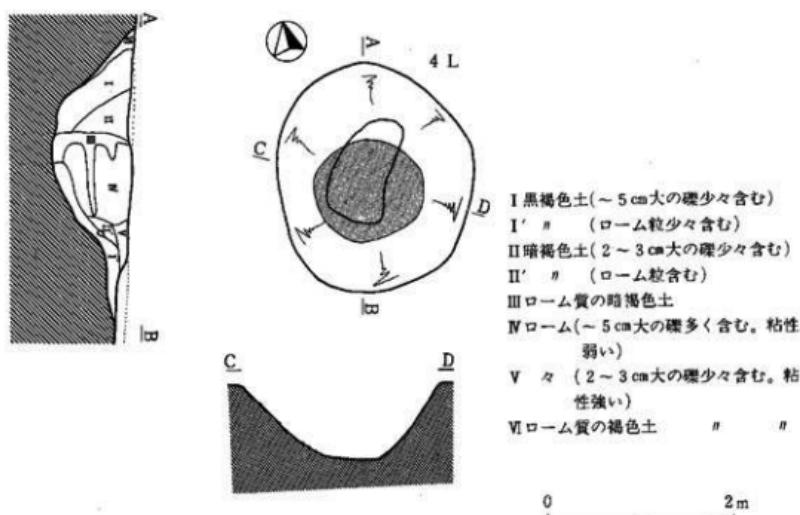
(4) 第4号ロームマウンド(第5図)

F-5グリッドで検出され、最も近くに位置する第3号ロームマウンドからでも43cmと、他の3基からは独立した位置にある。検出時、直径115cmほどの円形のローム土が暗褐色土中に確認され、ロームマウンドとは思われたものの、暗褐色土の落ち込みプランが判然とせず、特に東側ではまったく判別しえなかった。このため、南北に半載線を設定し、西側の掘り込み調査により、ロームマウンドであることを確認した上で、土層の記録後全掘した。

プランは、南北245cm、東西210cmで、やや椿円形を呈している。落ち込みは、全体的に起伏のない檍鉢状をなし、最深部で地山面より90cmを測り、他のロームマウンドに比して深いものであった。土層は、中央に、直径5cm前後の礫を多く混入する粘性の少ないローム土と、暗褐色土を



- I 暗褐色土
- II 黒褐色土
- III ローム(粘性があり、砂粒を含む)
- IV 茶褐色土(ローム粒混)
- V ローム(約5cm大の礫含み、一部黒褐色土混)



- I 黒褐色土(～5cm大の礫少々含む)
- I' " (ローム粒少々含む)
- II 暗褐色土(2～3cm大の礫少々含む)
- II' " (ローム粒含む)
- III ローム質の暗褐色土
- IV ローム(～5cm大の礫多く含む。粘性弱い)
- V タ (2～3cm大の礫少々含む。粘性強い)
- VI ローム質の褐色土 " "

0 2m

第5図 第3号・第4号ロームマウンド

若干含有する砂質ローム土が交互に重なるようにして地山に接して存在し、この周囲を内側から暗褐色土、黒褐色土が取り巻くように堆積している。南側では、地山と接する黒褐色土が再堆積ローム土下に深く入り込んでいる。

出土遺物はない。

(伊東 直登)

第2節 小竪穴(第6図)

今回の調査で小竪穴7基が検出された。これらは調査区の北側と南側の平坦な地点において確認され、調査区中心部の急斜面においては確認されなかった。平面形は円形または橢円形で、断面形は擂鉢状、タライ状のものがあった。

保存状態が良かったものとしては第4号小竪穴があげられる。ローム層をほぼ垂直に掘り込んでおり、確認規模120×115cm、底面規模105×95cm、深さ58cmであった。

これらに伴う遺物は確認されなかったため、時期は判断しかねる。個々については第2表を参照にされたい。

(腰原 典明)

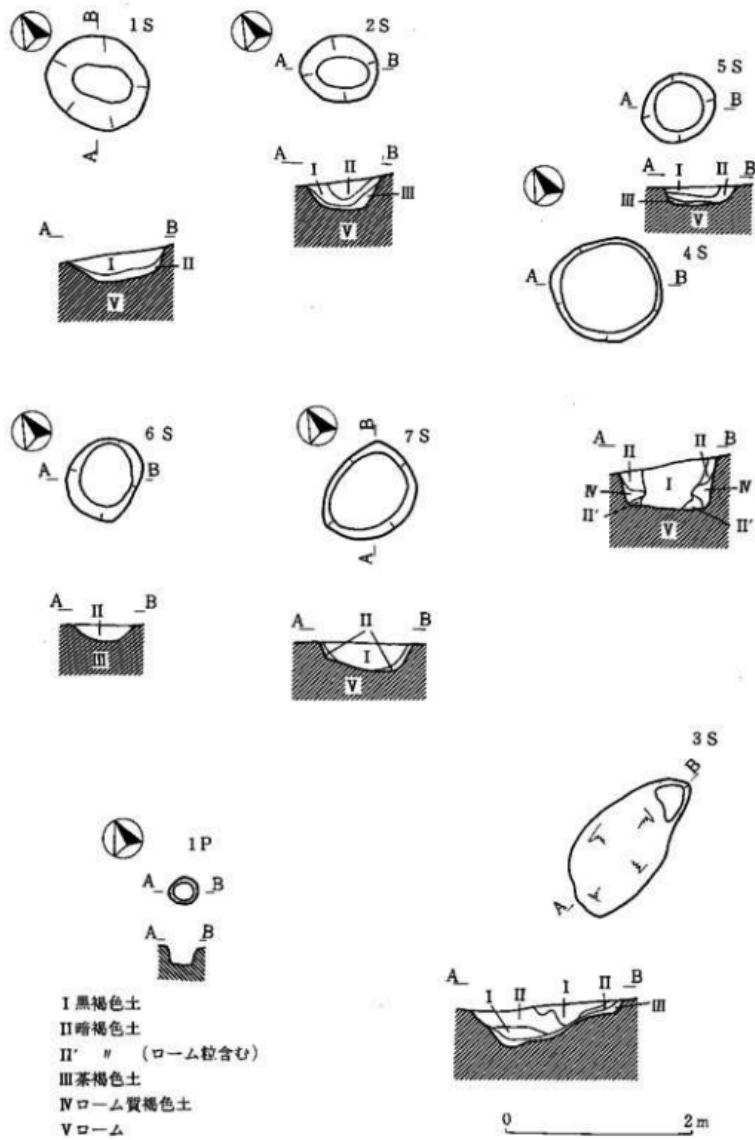
第3節 ピット(第6図)

調査区の北側G-3グリッドにおいて検出された。平面規模は30×30cmの大きさで、深さは20cmを測る。ピット内より土師の甕の破片数点(22)が出土した。またピット周辺においても平安時代の遺物が認められたことより、このピットが平安時代の遺構の一部であった可能性も考えられる。

(腰原 典明)

第2表 小竪穴一覧表

No	確認規模	平面形	主軸方向	断面形	底面規模	底面	深さ	備考
1	113×100	橢円		たらい状	84×75	平坦	40	
2	84×70	"		"	80×43	"	30	
3	173×99	"		擂鉢状	80×36	丸底(段々)	38	
4	120×115	円形	——	たらい状	105×95	平坦	58	
5	80×70	"	——	"	56×56	"	17	
6	90×75	橢円		擂鉢状	65×54	丸底	34	
7	110×90	"		たらい状	60×55	平坦	25	
1 P	20×30	円形	——	コップ状	20×20	"	20	土師カメの破片出土



第6図 小竪穴群

第V章 遺物

今回の調査では、縄文前期・中期・後期・晩期・弥生中期・平安時代土師器の土器片、石錐、石鉈、石匙、磨製石斧、打製石斧が出土した。

遺物の出土状態は、調査区全域にわたって散在し、平安時代土師器が調査区北端にやや集中しているほかは特別の状態は呈していない。

土器（第7図）

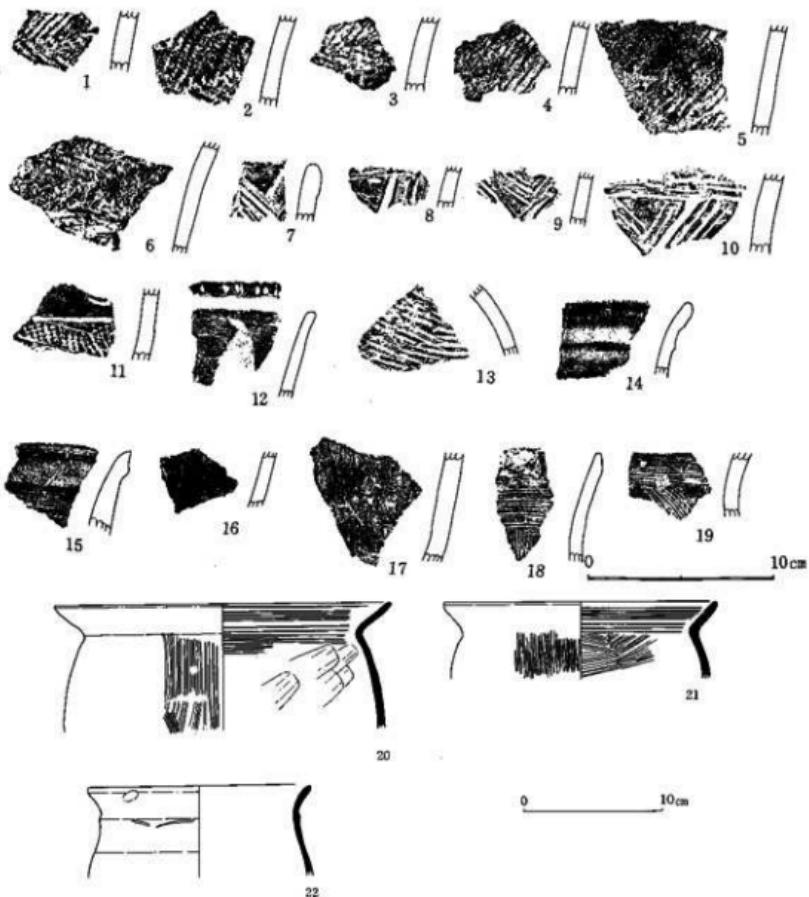
1～6は、縄文を施したもので、前期黒浜式に併行するものと思われる。7～10は、竹管による状線文が三角形をモチーフとして施されている。前期末ないし中期初頭に位置づけられるであろう。11は、磨消縄文をもち後期称名寺ないし堀ノ内期に比定できよう。12は、口縁部破片で、口唇部に刻目をもち、口辺部は無文となる。13は、壺の胴部破片で、条痕が施され、胎土に大粒の長石、石英を多量に含む。弥生中期初頭に位置づけられる。14、15は、口縁下に状線帯のみられるもので、状線部は極めて浅い。14の口唇は丸味をおびるが、15は面取りが施され、鋭い口唇を有する特徴をもつ。16、17は、無文の胴部破片で、14、15のような口縁をもった胴部と思われる。14～17は縄文晩期永工式にその時期を求める。18、19は、条痕的な状線を有するもので、該当する時期がはっきりしない。

20は、口径24.1cmの土師器甕で、現在高7cm。口径口内面には、ロクロを用いたと思われる横位のハケメをもち、それ以下にはヘラケズリ痕がみられる。また外面には、縫のハケメが見られる。21は、口径19.5cmの土師器甕上半部で、現在高5.6cm。外面は縦位のハケメ、内面は口縁部はロクロによる横位ハケメが、それ以下は斜位のハケメがみられる。22は、口径16cmの土師器甕上半部で、明瞭なロクロ痕を残している。極めて薄手。

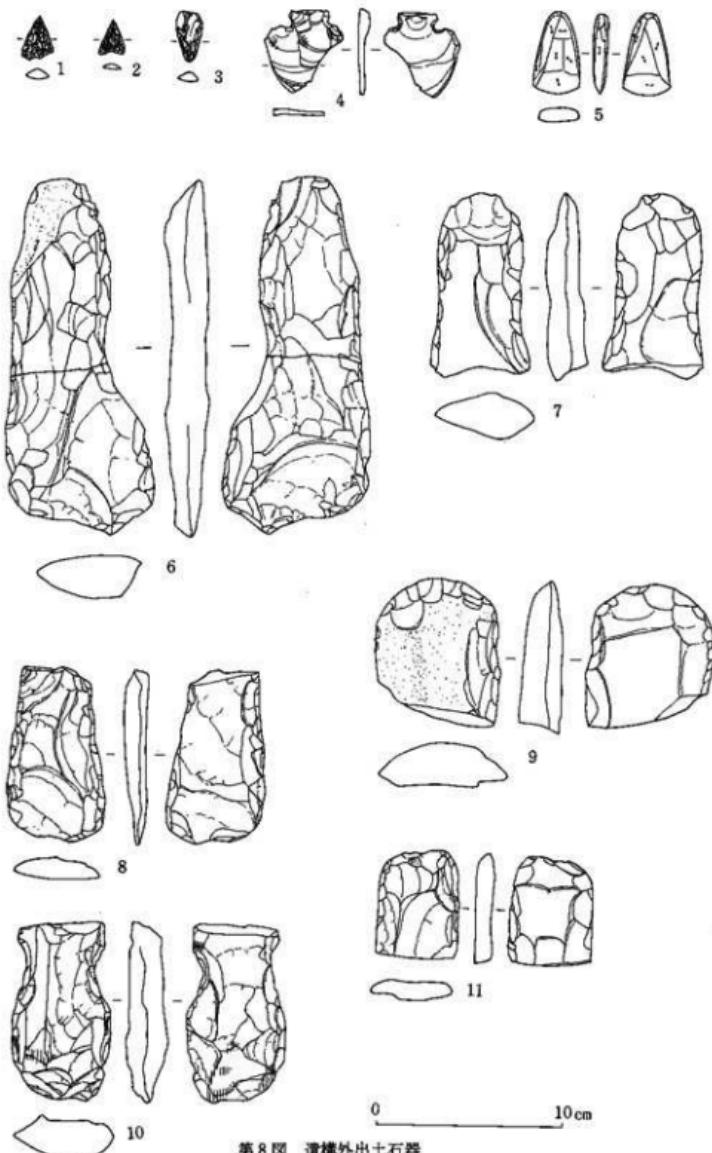
石器（第8図） 出土した石器には、石錐2、石鉈1、石匙1、磨製石斧1、打製石斧6の計11点がある。

石錐1・2は、ともに黒曜石製。1は長さ1.4cmで、脚の一部を欠いている。1.3g。2は底辺に浅い抉りをもつ。0.4g。石錐3は、長さ2.7cmの黒曜石製。石匙4は、刃部を欠く縊形で、調整は粗い。頁岩製、6.5g。磨製石斧5は、長さ4.4cmの小型で、丁寧な研磨が施されている。打製石斧6は、全長19.0cmの部厚いもの。頭部に原石面を残し、製作は粗雑で、7、9、11は、刃部を欠く。ともに調整は粗い、9は原石面を大きく残している。8は、頭部の一部を欠く短冊型で、作りは丁寧である。長さ9.4cm。薄手である。10は、肩部にくびれをもつもので、長さ8.8cm、分厚く、調整も粗い。刃部を中心として磨耗痕が認められる。

(小林 康男)



第7図 第1号ピット・遺構外出土土器



第8図 遺構外出土石器

第VI章 中原遺跡の過去の調査

中原遺跡は、昭和40年・50年の2回にわたり松本深志高校地歴会によって発掘調査が実施されている。

昭和40年の調査は、藤沢宗平、小松慶氏を指導者に3月16日～3月20日にかけて実施された。この時の調査の概要は『日本考古学年報』18(昭和45)に「長野県塩尻市片丘中原遺跡」として報告され、『あぜみち』15(昭和40)にも地歴会員の手による報告がなされ、また、昭和49年に刊行された『松本市・塩尻市・東筑摩郡誌歴史上』にも各所に記載がみられる。

以下『日本考古学年報』での報告を転載する。

長野県塩尻市片丘・中原遺跡

所 在 地 長野県塩尻市大字片丘小字中原9850・9856・9857

調査期日 昭和40年3月16日～3月20日

調 査 者 藤沢宗平・小松慶・松本深志高校地歴会生徒

調査概要 本遺跡は、東から西への傾斜面を西流する二つの小溪流によって切られたため生じた台地状地形の南斜面にある。東西約45m、南北約90mの範囲に、住居址4個を完掘した。その1は、勝坂式土器破片の多い地点を発掘して第1号住居址をえ、その2は1m四方の小ピットを4地点に設定して、そのうち、1ピットからは第2号住居址をえ、第2ピットからは地表した1.2mに竪穴住居址の床面と思われるもの発見、ほかの第3、第4ピットからは若干の加曾利E式土器破片をえたにとどまった。第3、第4号住居址は、ボーリング調査をすませた。第1号住居址は、5.04×4.43mの楕円形プランで、ほぼ中央に胴下部を欠く土器が埋められて炉址をなし、柱穴はこの周間に6個発見。傾斜地のため、一端はローム層深く側壁が作られ、他面は人工の側壁であった。時期は勝坂式に属するものである。第2号住居址は、5.56×5.20mの楕円形プラン。ほぼ中央に自然石大小10個を使って石囲い炉を設け、柱穴はやや複雑だが6個を推定。なお、東北隅は、ほかの住居に切られているらしく、いずれも、加曾利E式に比定されるもの。

第3号住居址は、4.04×4.90mの楕円形プラン。中央に竪穴状炉があり、柱穴は6個を推定するが、これも不規則にいくつかの小穴をもつ。側壁の自然石の下に埋甕があり、加曾利E式に比定されるもの。第4号住居址は、4.80×3.50(?)mの楕円形プラン。中央に地床炉、柱穴は6個を推定。加曾利E式に比定されるもの。なお、石鎌、打製石斧、磨石斧・石匕・凹石、石錐など53点出土し、第1、3、4号住居址内からは12～19個出土したのに対し、第2号住居址内からは僅か4個、少ない土器片の出土とともに注目された。

(藤沢宗平・小松慶)

この時の出土遺物は縄文前期諸磧A・B、中期初頭、新道、藤内、井戸尻、曾利各期の土器、石鎌、打製石斧、磨製石斧、石匙、凹石、石錐がそれぞれ出土している。これらの遺物のうち各住居に伴う遺物は不明確であり、時期的決定、各遺物のセット関係などが捉えられないのは残念である。石器についてだけは『あぜみち』に一覧表が掲げられているので数量的なものは知ることができる。

昭和50年の調査は、小松虔氏を指導者として実施された。

この時の報告は未刊であるが、概要が『長野県埋蔵文化財発掘調査要覧その3』(昭和54)に記載されている。以下それを転載する。

1046 中原遺跡

所在地 塩尻市片丘北熊井中原

調査期日 昭和50年3月12日～3月18日

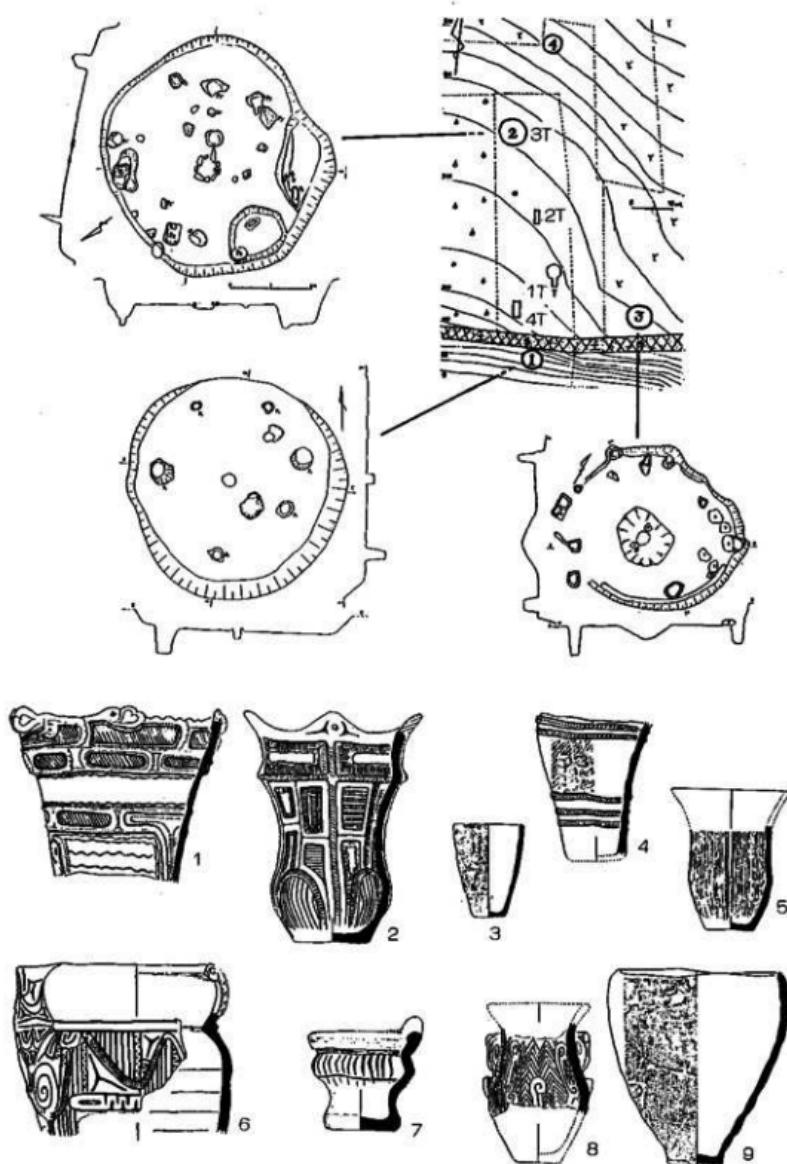
主催者 松本深志高等学校 担当者 小松 聰

調査概要 縄文前期と平安時代の住居址各1軒を発掘した。縄文前期住居址(2号住)は、6.8m×5.0mの長方形プランで主柱穴4ヶがあり、中央には2ヶの石を含む焼土が径1mに亘って存在した。

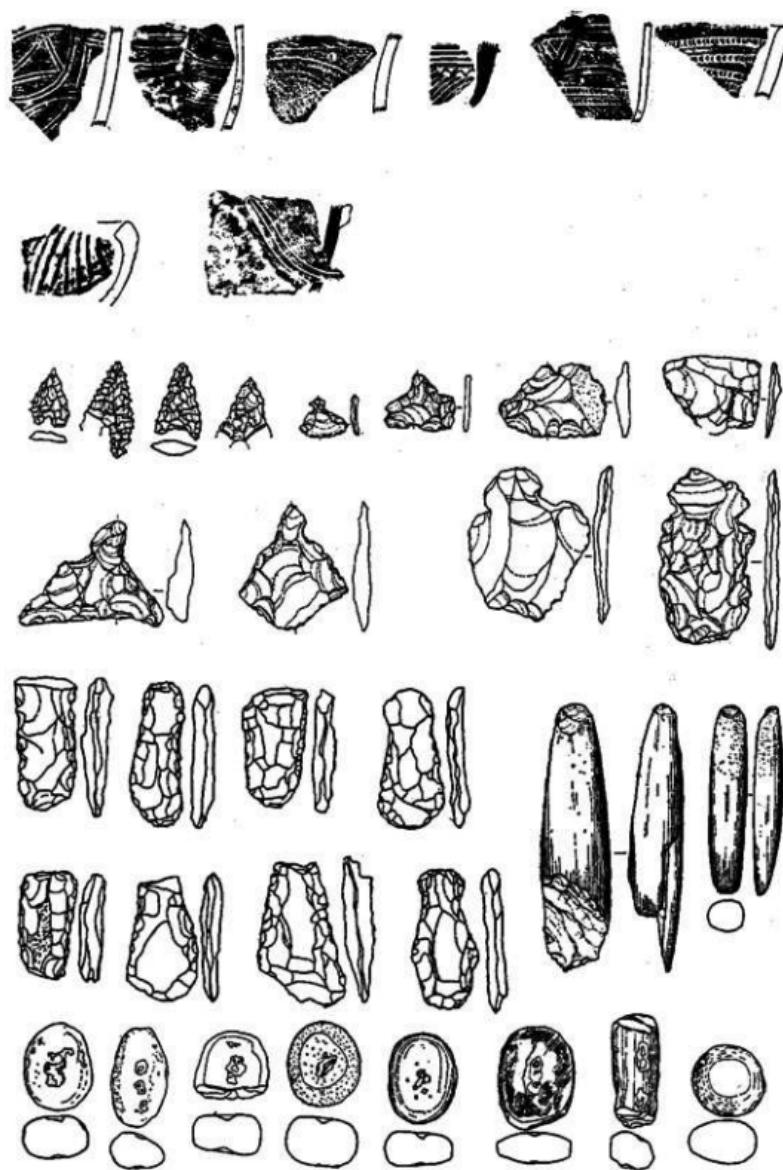
土器は関山式で側壁上から深鉢1点が出土している。平安時代の1号住は6.0m×4.2mの長方形で、西北隅に石組窓があり、それに接して北側に石組の遺構があった。須恵器坏、灰釉陶器破片、鐵塊が出土している。

以上のように、中原遺跡は過去に2回にわたり発掘調査が実施され、今回の調査とも合わせると縄文時代前期、中期、後期、弥生時代中期、平安時代にまでおよぶ遺跡であることが判明した。そして、この成果を総合することによって、遺跡の構成をある程度うかがい知ることができよう。

住居跡	1	2	3	4	計
石 鎌	2	0	2	1	5
打製石斧	12	1	11	5	29
磨石斧	1	1	0	0	2
石 匙	0	0	3	4	7
凹 石	2	2	3	2	9
石 锥	1	0	0	0	1
計	18	4	19	12	53



第9図 中原遺跡全体図・出土土器



第10圖 中原遺跡出土遺物

第VI章 まとめ

東山山麓地区農道整備事業実施に伴って行われた中原遺跡の調査結果は、住居址の検出はなかったものの興味深い資料を幾つか提供してくれた。

中原遺跡は、過去の調査によって縄文前期、中期、平安時代の集落址であることが判明していた。この調査地域は、今回の調査区域から250mほど上方にある。やや距離的に離れているが今回の調査で出土した遺物も同時期のものを網羅していることから考えて、この両地域は同一の遺跡として捉えてよく、遺跡の広がりを示している。

遺構にはロームマウンド、小豊穴、ピットが検出されている。前記集落の外縁部にあたると思われるこの地域からの小豊穴検出は、集落構造を考える上で重要である。墓壇というより集落の外側に設けられた貯蔵穴群としての性格を有するものであろう。この片丘地区は縄文中期遺跡の密集地として著名である。中原遺跡の存する南側の台地上には同時期の祖原の大集落址があり、北側の台地上にも遺物の散布が知られている。したがって中原遺跡の生活領域は、この遺跡の立地する台地上に限られ、この中で住居、墓地、貯蔵、生産などの諸活動が展開されていたものと考えられ、今回はその最末端地域を調査したものといえる。

縄文晩期、弥生中期初頭の土器は、予想外の出土であった。最近、塙尻市内でもこの時期の遺物出土が目に付くようになってきた。その出土場所は田川沿辺の低平地を中心とし、長歓堂の前、福沢、君石、平出などで遺物が得られ、中原遺跡のような高所からの発見は稀である。今後、弥生文化波及期の解明での興味深い一資料となろう。

平安時代の遺物と過去の調査での住居の発見は、該期の山間地集落を考察する上で好資料となる。付近には、祖原、舅屋敷、小丸山、内田原、高山城など10軒内外の集落が発見されている。田川流域に展開する吉田向井、吉田川西、丘中学校などの大集落と対比して考えるべき性格をもった集落といえ、その存立基盤問題をも含めて究明すべき課題の多い資料といえる。

以上のように、遺構、遺物の検出量は恵まれたものとは言い難かったが、それぞれの時期に特色ある資料の発見がなされ、この地域での原始、古代史解明にとって貴重な一資料となろう。

(小林 康男)

図 版



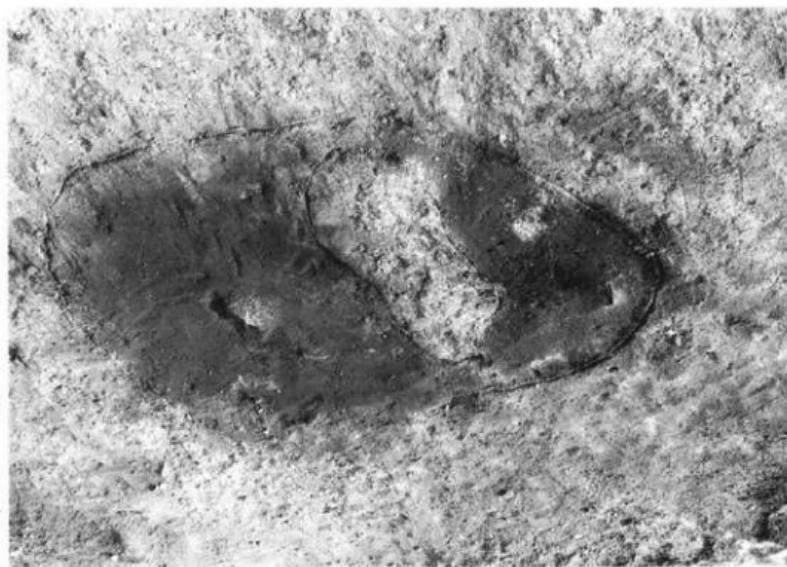
中原遺跡全景（東側より）



調査地区全景（北側より）



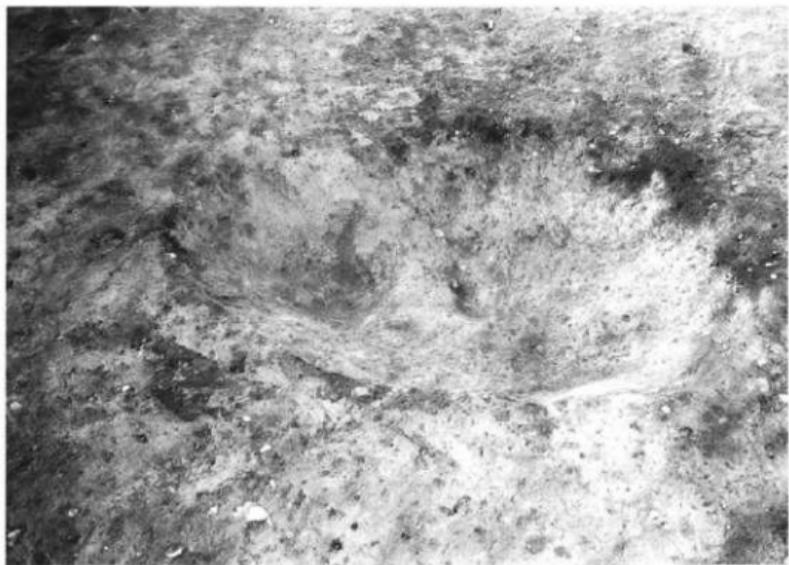
調査地区全景（南側より）



第1号ロームマウンド（検出面）



第1号ロームマウンド（断面）



第1号ロームマウンド（全貌）



第2号ロームマウンド（検出面）



第2号ロームマウンド（黒色土全掘）



第2号ロームマウンド（全幅）



第3号ロームマウンド（検出面）



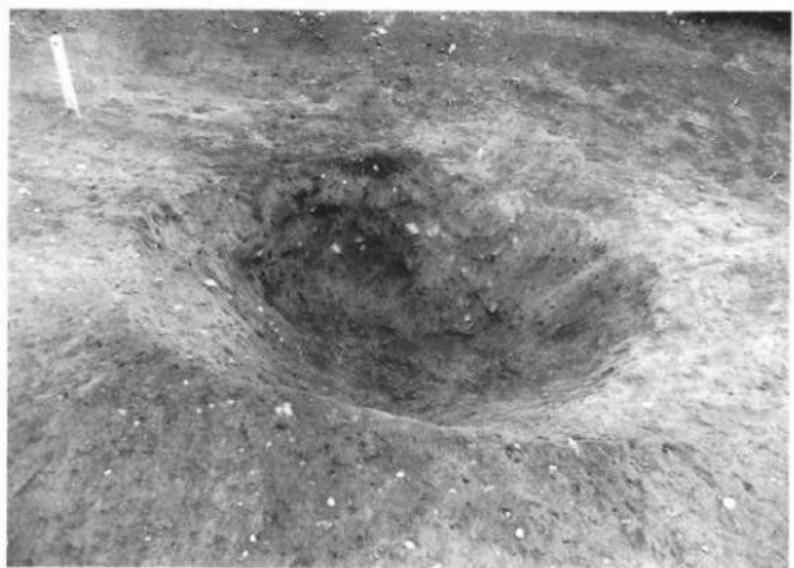
第3号ロームマウンド（全撮）



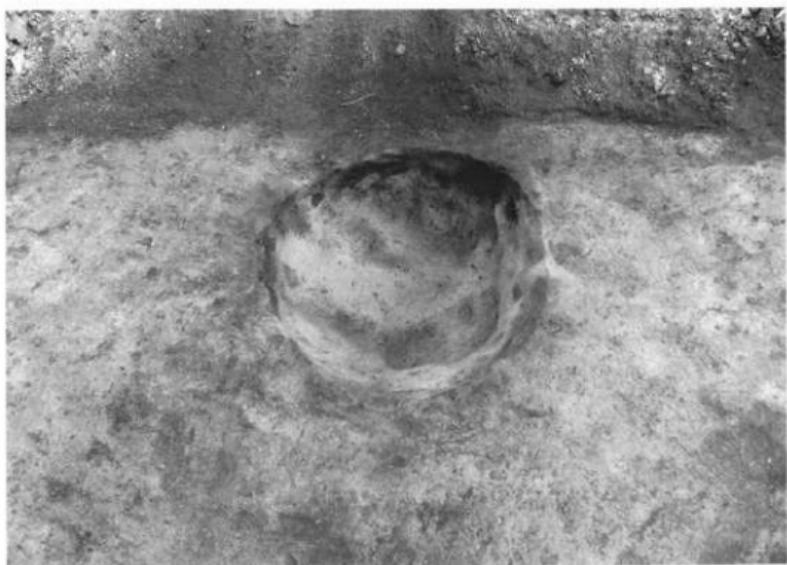
第4号ロームマウンド（検出面）



第4号ロームマウンド（断面）



第4号ロームマウンド（全観）



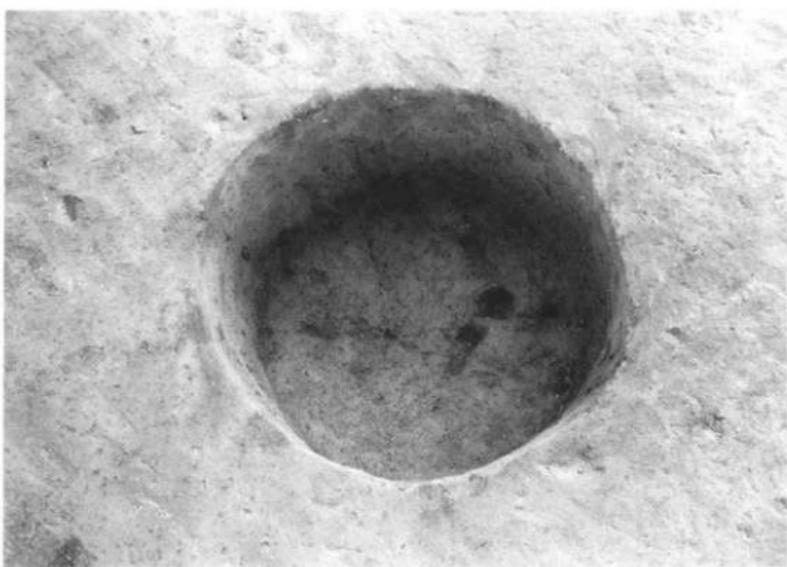
第1号小堅穴



第2号小堅穴



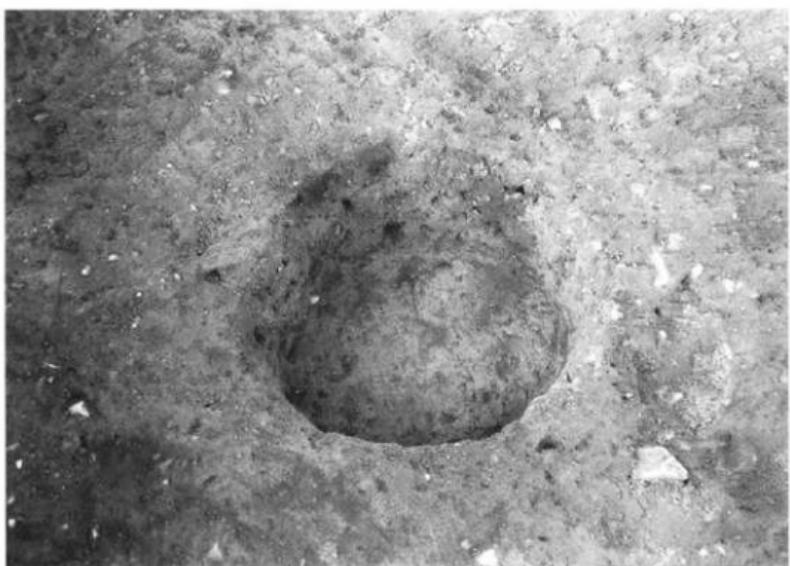
第3号小竖穴



第4号小竖穴



第5号小竖穴



第6号小竖穴



第7号小堅穴



第1号ビット



発掘作業風景



発掘作業風景

中原遺跡

—長野県塩尻市中原遺跡発掘調査報告書—

昭和62年3月20日 印刷

昭和62年3月22日 発行

発行 塩尻市教育委員会

